

# 長塚節の写生文についての研究（その二）：「佐渡が島」を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 深川, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/7398">http://hdl.handle.net/2297/7398</a>

# 長塚節の写生文についての研究 (その二)

— 「佐渡が島」を中心に —

深 川 明 子

「写生文」の内容は写生文作家の個性によって大きく相違があり、また、成立・発表の過程においても「写生文」に対する認識が変化している。しかしながら、初期から長く主流を占めていたのは、俳人系の写生文作家であり、大まかに言えば、写生文の内容的特色を俳趣味に置き、その表現技法としては、客観的描写を重んじていたと言えよう。勿論、歌人系の作家伊藤左千夫などはその間にあつて、「千本松原」など情味豊かな彼の資質を生かした作品を発表し、俳人系作家とは違った持味を出していたが、大きな存在ではなかった。

その写生文の世界も、明治三十九年・四十年頃かなり大きな変化を迎えた。それは、伊藤左千夫の「野菊の墓」(明39・1)『ホトトギス』、鈴木三重吉の「千鳥」(明39・5)『ホトトギス』、夏目漱石の「草枕」(明39・9)『新小説』、高浜虚子の「風流懺法」(明40・4)『ホトトギス』などの小説が生まれたことである。このような小説の登場によって、写生文も作家の主観を重視する傾向へと変化していった。その間の事情を高浜虚子は、明治四十年十二月号の『文章世界』に置いて「写生文界の転化」と題して次のように説明している。

明治四十年の写生文界なる題目を置いて論ずる時には、何人も第一に従来の写生文なるものが、小説の方に一歩一歩歩を移し始めたと云ふ批評を

下すことに一致してゐる様に見える。

と、まず、写生文界を概観して、

従来の写生文は事柄に重きを置き、近來の小説が、つた方の写生文は作者の感想の方に重きを置く傾向になつて來たのである。

と、傾向の推移を大きく単純化して捉え、さらにその「小説が、つた写生文」を「主観的写生文」と呼んで、その特徴を次のように述べている。

— 客観的描写に重きを置く事は何れも変りはないが……先づ作者の主観の側に重きを置いて、其の主観を経來りし客観的描写を重んずる。……敢て主観其の儘を文学の上に現さんとするに非ずして主観を通し現れたる精細なる客観描写を重んじ、客観描写を通して、底深く深遠なる主観を窺ひ得る事を目的とするもの。 —

一方、従来の写生文を「客観的写生文(冷やかなる態度に於ける写生文)」と呼び、「(今年)作品が少なかつたばかりでなく、何れも少しづつは主観的写生文の影響を受けて居る。」と、やはり全体的に主観的傾向のあることを指摘している。

このような主観的傾向は、従来の写生文が標榜していた素材に対する客観的態度と客観的描写の技法を一応完成したと共に、漱石及びその門下生が新たに加わり、従来の理論に必ずしも抱泥せず個性的な作品を発表し始める人的新旧交替の時機を迎えたからである。

節の「佐渡が島」は、写生文界がこのような大きな転機を迎えていた明治四十年十一月号の『ホトトギス』に発表された。（注1）高浜虚子は前述の「写生文界の転化」の中で、「佐渡が島」を客観的写生文として扱い、次のように評価している。

（客観的写生文の）主要なるものを二三挙ぐると、坂本四方太の「夢の如し」、寒川風骨の「帰省雑事」、高橋伊佐男の「鯉釣り」、長塚節の「佐渡が島」等、其の尤なるものとする。中にも「佐渡が島」は本年中の客観的写生文の第一傑作なりと推賞するを憚らぬ。

そして、「佐渡が島」は、この年発表された写生文の秀作四篇を集めて、明治四十一年一月、東京堂から発刊された『新写生文集』に収録された。この『新写生文集』に対する写生文派以外からの批評としては、明治四十一年三月号の『早稲田文学』所載の「新刊書一覽」がある。それには、「どこかにしつとりとした情味といふやうなものが一層深く加はつて来たのはこの四篇のいづれにも見られる。」と主観的傾向を「情味」と表現している。また同書では文学史的意義にも触れて、「わが文壇の一方に在つて写生文が文体乃至情味の特長なるものを提供し、暗々裡に一般の文章に清新発潤たる生氣を注入し来つたことは争はれぬ。」と、写生文の果たした役割を述べると共に、「（『新写生文』は）一個の読みものとしての外に、所謂新写生文の見本として、少くとも文章史上注目すべきものの一つである。」と評価している。

しかし、その後客観的写生文は次第に衰退していく。そのことを市橋鐸氏は「本冊の四篇はいずれも傑作ではあるが、従来の写生文に別れを告げる晩鐘とも思惟せられる。この後純粋写生文集の刊行に恵まれず、これが最後の集となったことが、よりよく証明しているようである。」と述べておられる。（注2）

以上、文学史上の評価を中心に述べて来たが、次に、節の佐渡が島旅行および「佐渡が島」執筆の頃の節の生活へ筆を進めたい。

## 二

明治三十九年、長塚家の借財はどうしても一度整理しなければならぬ状態にまで達していたので、節はそのため東奔西走の毎日であった。が、それも一段落した六月二十八日、常陸の平潟海岸へ出かけた。旅先から親友の寺田憲へ宛てた書簡には、三週間の滞在中、晴天は三日という不遇であったが、「歌三十首をえたるがせめてもの心やり候。近來少しく興湧き来り候。」と書いている。この時の作歌は、同年十月号の『馬酔木』に「青草集」として、帰郷後の作も含めて発表された。平潟海岸滞在中の歌について北住敏夫氏は、「天水のよりあひの外に雲取り拭へる海を来る松魚船（詞書略）の如き、海上の光景を大きく擱んだ歌よりも、松陰の沙にさきつづくみやこ草にはひさやけきほの明り雨（詞書略）など、ささやかな自然物に細かく目を配つたものに手馴れた巧みさがある。」（注3）と述べておられるように、作風の特別顕著な変化は見られない。しかし、帰郷してから作歌した「南瓜の茂りがなかに抽きいでし莠そよぎて秋立ちぬらし」などは、写生の句ではあるが、感情が移入されており、主観と客観の融合した境地を見いだしたように感じられる。だが、実際にそれが定着し、確固たるものになるまでには、これからしばらくの間作歌上の苦悩が続いたようである。

この平潟海岸への旅は保養と所用を兼ねた旅であったが、越後・佐渡への本格的な旅行については、かなり早くから計画していた。寺田憲宛の書簡によると、六月十三日付けで、憲の健康を気づかうと共に、「七月末には越後より佐渡への旅行を執行致し度存じ居候。」とある。しかし、実際には平潟海岸への旅などが入ったために出発は遅れた。旅程は、同じく寺田憲宛の書簡では、七月二十四日付けで「小生は来月半過ぎには行脚に出で、越佐兩國を経て山形仙台に遊ばむと存じ候。」とあるが、八月七日付けの書簡では、「先づ松島より金華山を見て引つ返し、会津より越後に出

で、佐渡へも航したき所存に候。」とあって、ほぼ計画も具体的に煮詰まって来たようだ。そして、この一連の書簡を見ると、佐渡は最初からこの旅行の目的であったことがわかる。

なお、八月七日付けの書簡には、前述の文に続けて、「此行も歌よみたき志望に候へども、近来兎角不評判にて困り申候。小生も自身に聊か悟り申候へども急には改めかね候。」と作歌活動の苦悩の一端を吐露している。そして、旅行の途中で作歌をあきらめ、紀行として発表することを決意し、旅行中日記を付け始める。節はこの旅中、日記を付けることによって、今まで事実拘泥し過ぎ、そのため余裕のある作品に乏しく、しばしば人に非難されていた自分自身の欠点をはっきりと認識したようだ。「歌を作ることには兎角恐ろしきものに相成申候」(明39・10・19 寺田憲宛書簡)と作歌に恐怖心を抱くまでになった。また、秋頃から母の健康が勝れず、末妹はなも縁付いた長塚家では、節の肩にのしかかってくる家事の雑事も多く、作歌どころでない状態でもあった。父は相変わらず外出がちであり、健康の勝れなかった母も、翌四十年三月入院したので、節は一人で一家を切盛りせねばならず、ますます多忙をきわめ、そして、身に染みて女手のない不自由さを託つのであった。母が退院して間もなく、節は弟順次郎の縁談を進め、七月下旬に婚姻を成立させている。そして朝鮮に出征中の末弟整四郎を除いて弟妹たちの結婚がすべて一段落したところで、節は彼自身の結婚について真剣に考えるようになる。

そこで、具体的な縁談として話題に上ったのが井上艶子との話である。節は彼の情熱の全てを賭けたと思われる程熱心に取り組み、成立を懇望した。仲介人になった岡麓へは、「御申越のふしどし何れも申分無之、此上は十分の運動仕り、他人に奪はれざる工夫專一に可仕候。容姿十人なみ少し上と申も、此は東京の標準故、先以て田舎へ連れ来り候ては、必ず上の上ならむと存候。此点も頗る満足に有之候。十六頃の写真を見るに、小生殊の外気にいり申候。只先

方に嫌はれ候ては、折角の熱もさめ可申道理、此辺随分しつかりと相構ひ可申候。」(明40・8・6 書簡)と婚姻の成立を切望する書簡を送っている。しかし、この縁談もなかなか順調に進まず、九月二十日付けの書簡には、「第二回目だけにては或は如何かと懸ねんも候へども、更に今一回御足労下され候ことならば、先方に於ても何よりもまづ、義理にからまれ申ことにも相成可申と存候。貴兄も随分迷惑至極の御事とは存じ候へども、乗り掛けた船向ふの岸まではおとどけ下されたく願上候。」と強引とも思える態度で臨んだのだが、遂に成立しなかった。節は傷心の胸を抱いて、十月中旬平泉から象潟への旅に立ったのである。

一方、作歌に関しては、長い沈黙を破って五月号の『馬酔木』に「早春の歌」が発表された。これは、「天の戸ゆ立ち来る春は蒼雲に光どよもし浮きただよへり」を初めとする九首であるが、同時に発表された「左千夫に寄す」と題した「蒼雲を天のはがらにいただきて大き歌よまば生ける驗あり」など六首とともに、構想が大きく主観の投影されたふくやかな歌柄は伊藤左千夫の歌風に近いものがある。春さきの大気の揺れと節の心境が渾然融和した荘重な調べの歌ではあるが、その中に細かい感覚のあるところは節独自の歌風でもある。春気の充満を感じている作者の充実した喜びが作歌の動機となっており、作者の主観が歌の中に投影されていると言えよう。

その後はまた作歌が途絶えるのだが、約半年程経て、「小夜深にさきて散るとふ稗草のひそやかにして秋さりぬらむ」や、「馬追虫の髭のそよるに来る秋はまなこを閉ちて想ひ見るべし」など佳作「初秋の歌」十二首が生まれた。この歌について橋田東声は、「題材は例によつて田園の草木や虫類である。それを通して新秋の夜の清冷がしみ／＼と緊密に詠ひ出されてをる。」(注4)と述べている。今までは概ね微細な観察によるただ単なる事象の説明・羅列に終始

していたが、この一連の作は繊細な観察力によってかすかな秋のけはいを詠み得ることが出来、透徹した観察力が窺われると同時に、歌風に主観的傾向がかなり濃厚に出ている。昨夏の「南瓜の……」以来途絶えがちな作歌活動ではあったが、また、次第に主観的傾向を帯びて来ていたのであったが、一応ここで明瞭な作風の変化として指摘することが出来るのである。そして、このような作風の変化には、前述した三十九年の旅行中の書簡に述べられていたように、従来の作風に対する痛切な反省と、日記を付けることによって自らの欠点を認識し、脱皮する努力があったからで、歌の収穫は一首もない旅ではあったが、作歌における作風の変化の土台をなした旅行であったと言えよう。

節が自分の歌の中に現われた主観的傾向について、それを意識し、自ら文章化したものに、明治四十年十月二十八日付けの久保田俊彦（島木赤彦）宛の封書がある。

等しく目に映する処のもの、一たび作者の頭脳を透して現はるる時、其所に生命を有せざるべからず。即ち作者の主観が濃く又は薄く表はれねばならぬものと存じ候。此点に就いて小生の昨年あたりまでの、唯々自然の材料にのみすがりたる写生の歌は全くつまらぬものと存じ候。……

南瓜の茂りがなかに抜きいでし莠こよをよぎて秋立ぬらし

を岡麓君は三四の句に秋意十分なりと申され候。……小生の前述の主観と申候は、此様なものと覚召され度候。

節自身はこのように説明しているのである。

以上、佐渡が島旅行、およびその執筆に当たっていた頃の節の身辺上の問題と短歌の作風について概略を述べた。紀行文「佐渡が島」は、「客観的写生文」ではあるが、写生文界の主観的傾向と軌道と同じくするものであると評価されていることについては一で述べた通りだが、単にそれは、写生文界の一般的傾向に左右されたと言うだけでなく、節自身の内部に作歌を通して準備されていたことなのである。

次に節の写生文において、主観的傾向がどのようにして現われ

てきたかについて筆を進めることにする。（注5）

### 三

節は写生文の技法の基礎を「写生」に置いていた。そして、作品の上では、「才丸行き」あたりでその技法を体得したと言える。（注6）しかし、事実の客観的な写生は、節の場合ともすると、部分の描写に熱が入って全体の統一を欠く結果になったり、文章に山がなく平板な作品になってしまふ傾向が強かった。また、節の写生文は情味が薄く、抒情的傾向が乏しいと言われるのもその結果だと考えられる。そして、節は、基本的にはそう言う傾向から完全に脱却出来なかつたのであるが、基礎的な写生の技法を体得した「才丸行き」以降の作品には情味も多少加わるようになった。節の写生文で情趣が多少なりとも表現されたのは「瘡のあと」からである。

これは十八才の時、初めて塩原へ徒歩旅行を試みた体験に基づいて書いた作品である。温泉滞在中のある日、洪水によって出来たと言われる湖を見物に出かけて帰路、暗い山中で足を踏みはずし、崖から転落した時負った瘡がある。その瘡を見るたびに温泉宿の親切な娘、「まあちゃん」が思い出されるのである。

過去の体験が素材になっているため、構成は回想形式をとり、執筆動機が、その体験によって喚起される現在の心情にあるだけに、作者の主観的的心情が自然な形で出ている。

瘡のあとを見るたびに思い出すのは、直接的には、瘡を負った時の体験なのだが、それと関連して必ず心に浮んで来るのは親切な「まあちゃん」の姿なのである。作品の中で、「まあちゃん」が登場するのは、温泉に到着した最初の場面と作品の最後だけなのだが、特に最後の場面は、「其後心切なまあちゃんはとうなつたであらう。聞くの便りもない。予が眼に浮ぶまあちゃんは何時でも十七の時の姿である。」と、「まあちゃん」に対する現在の心情

で結ばれているだけに印象が鮮明になっている。作品の素材・叙述は大部分が転落した時の体験記であるが、作品全体の印象としては、作者の主観が表出された宿の娘の存在を忘れることは出来ない。

ここで注目しておきたいことは、「痲のあと」で初めて素材に女性を取り上げられたことである。節の作品の中では、写生文として発表された第一作の「月見の夕」に女性が登場している。これは、女性の描写、特に会話にユニークな面白さを持っていたが、それらは単なる対象物として客観的に写生されていたにすぎず、この作品のように、素材に対して作者の感情が移入されてはいなかった。ところで、この作品の場合、女性「まあちゃん」が作品素材の中心ではなく、付加的な存在であることは前述した通りである。ただ作者の主観の心情の表出のために、女性を登場させ、作品に情趣を加えていると言う意味で、女性の新しい登場は、作品自体に少なからず変化をもたらした。

「痲のあと」は明治三十九年三月の発表であったが、その四か月後に発表された「炭焼の娘」では、「女性」が素材としても中心的位置を占め、作者の視点はその女性に焦点が合わせられている。節の写生文にはこの後も女性は作品の素材として、構成の重要な一部分を占めるが、この作品のように焦点が統一された作品はない。

ところで、「炭焼の娘」と言う作品は、節が炭焼の研究のため、房州の清澄山で一週間滞在して見学した時、そこで働いていた娘「お秋さん」の働きぶりや、可憐で慎ましやかな態度を描いた作品である。次に、「炭焼の娘」から「お秋さん」に対する作者節の主観が叙述されているところを拾い出してみよう。

①「あの雨の降る日などにはその木まで猿がまわります」とお秋さんが傍からいった。お秋さんは滅多にいはいはぬ。自分は何かいはいして欲しかったのだから、糸口が開けた様に思はれてこれだけが満足であった。射干が急に延び出して赤い花が目前に開くのを見る様な心持である。

②お秋さんはこんなに忙しく仕事をして居たと思つたら、ふと見えなくなつた。自分は谷が急に寂しくなつた様に感じた。尋ねるといふでもなく昨日炭木の運ばれた窪みを登つて行つた。

③毎日自分と一所にお秋さんの許へ落ち合つた島の人はたうとう来なかつた。——中略——此男が来なかつたので何故だか心持がよかつた。

④お秋さんは鼻筋の慥な稀な女である。然し世間の若い女の心に満足と思はるべきことは一つも備はつてない。かう思ふと何となく同情の念が思はず起るのである。

⑤自分は規則正しく植ゑられた桜の木の青葉の蔭に佇んで待つて見たがどういふものかお秋さんは遂に来ない。然し茶店まで戻つて見るといふこともしえなかつた。自分は急に油が抜けたやうな寂しい心持になつて宿へ帰つた。

⑥清澄山は自分にはすべてが満足であつた。然しお秋さんと言葉を交して別れなかつたことはどうしても遺憾である。針へ通した糸のうらを結ばないやうな感じである。

以上は、節の心情が直叙され、作品を主観的にしている大きな要素であるが、特に、⑤⑥は積極的でなかつた自分自身の行動を惜む心情に余韻があり、しつとりとした情趣が感しられる。その他、作品に主観的情趣を加味しているものとして、お秋さんの描写における「白」の使用を挙げることが出来る。節の「白」への好尚については、前稿で触れたので重複は省くが、この作品において白が多く使用されている。特に「お秋さん」の素材で清楚な美しさを強調するために白を使用し、「お秋さん」のイメージを読者に髣髴とさせると同時に、作品にも詩趣を添えていると言える。

次に、具体的に作品の中から抜き出してみよう。

①尻ぎりの紺の仕事着に脚絆をきりつと締めて居る。さうして白い顔へ白い手拭を冠つたのが際立つて目に立つ。

②お秋さんの造つた曹達は純白雪の如き結晶である。

③手拭をとつたら顔が赤らんで生え際には汗がにじんで居た。うららかな日に幾らかの仕事をしてぼつとほてつて来た時は肌の色の美しさが増さるのである。白いものは殊更に白く見える。

④じつと見て居ると何処からか胡粉を落したといふ様にぼちつと白いものが見え出した。漁舟である。二つも三つも見え出した。白帆はもたらそこにあつたのだ。尚じつと見つめて居るとぼちつと白いのが段々自分へ逼つて来るやうに思はれる。遠くはすべてがぼんやりである。谷の梢や胡蝶花の花や椗の真白な板や近いものは近だけ鮮かである。さうして最も近いものはお秋さんである。

①②は働いているお秋さんの美しさがきわめて印象的に描かれている。平常から労働に従事している人人を目にし、関心をもって見た節であつたから描き得たとも言えよう。②は、彼女の手に成つたものを、「純白雪の如き」と比喩することによって、純粋無垢な彼女自身を象徴している。④は、背景の白に焦点を合わせながら、一番近いお秋さんが最も鮮明で美しいことを描き、そのお秋さんの傍にいる作者節の喜びが表現の中にじみ出ている。

「白」の清浄素白な色感の多面的な活用で、「お秋さん」の清楚なイメージを助長し、その「お秋さん」を中心とする一つの作品の世界を作りあげていると言える。そして、それは作者が作りあげた世界、つまり、節の心情によって美化され、理想化された作品の世界であり、「お秋さん」であると言える。

以上、「炭焼の娘」における主観的要素と言う形で、作者のお秋さんに対する心情の直叙された部分と、節の主観によって美化されたお秋さん——それは節の好んだ「白」の使用の中に間接的に表われている——の描写の部分を具体的に抜き出してみた。確かに、全篇を通じて「炭焼の娘」においては、作者の視線は絶えずお秋さんに向けられており、節のお秋さんに対する好意的な心情は作品の中に充分表現されている。しかし、作品全体を考えた場合、この作品はやはり客観的描写に主眼が置かれており、たとえは、

自分は薪へ腰を掛けた。お秋さんの手拭の糸目の交叉して居るのまではつきり見えるまでに近寄つた。お秋さんは両足を延して左を枯木へ乗せて居る。鋸を押したり引いたりする毎に手拭の外へ垂れた油の切れたほつ

れ毛がふらふらと揺れる。懶い様な鋸の音の外には何の響も無い。お秋さんは異様な真面目顔で鋸から目を放さない。自分も腰を掛けた儘ほつれ毛と白い襟元を見詰めて居るばかりである。

など、お秋さんの描写においても、微細な客観描写が生彩を放っていると言えよう。

節は久保田俊彦（島木赤彦）宛の書簡（明41・9・20）の中で、「以前は写生文といふものは、東京市中の出来事を洒落れて云はねばならぬもの様に誤解致し居候。されば文章の善悪の如きもちつとも判断がつかず一向に迷ひ居候。炭焼の娘を書きし時は稿を改むること前後六回程にて、八頁のものに六ヶ月を費し申候。……然し其時以来人の文章を見て是非の判断に苦しまぬやうに相成候には自分ながら喫驚致し候。」と書いている。この「炭焼の娘」によって文章観を確立したことを述べているわけだが、それは作品の上でも肯首出来るのである。

なお、この作品の執筆に当っては、伊藤左千夫からの適切なアドバイスがあつたことも一言付け加えておきたい。左千夫からの明治三十八年五月二十七日消印の書簡によると、「色の白いやさしいものを山として文章を作つたら面白さうぢやないか、見逃すことの出来ぬ好題目の様に思はれる。

母父の言のまに／＼山こもり炭焼居るかくはし女にして  
若葉さす清澄山の八瀬尾にし炭焼く少女見ねどこひしも」

とある。清澄山で「お秋さん」に直面して日を置かず、彼女の白く、清楚で慎しい姿を左千夫へ書き送った返事であろう。写生文に書き上げることを勧めた左千夫は、さらに、明治三十九年三月二十三日の書簡で、「痕のあと」に文章の山がないと述べた後、「清澄の文に注意し給へ」といって、「略す所は略し種になる所を委しく書けば自然に山が出来る也」と述べている。「炭焼の娘」完成にあたって左千夫の存在は看過出来ないものがある。

#### 四

節の写生文は、客観的描写に主眼を置きながらも、主観的的心情の叙述も加わり、作品に情趣が感じられるようになった。ここで

は、一で述べたように、文壇で一般的に指摘されている「佐渡が島」の主観的傾向について、具体的に考察してみたいと思う。

自分の頭の上を金銀の水が絶えず流れて居るのかと思ふと金山が急に美化されてしまったやうに感ぜられた。佐渡は此の如くして到る所余がために装飾されて居るかと思はれる。

と、本文中に節自身が述べているように、紀行文「佐渡が島」は、節の主観のベールに覆われた、節の作品としての佐渡が島に他ならない。そして、その「装飾」の動機となった最大の原因は小木の宿の美人である。

気がついて見ると此女は驚くばかりの美人であつたのだ。まだ二十には過ぎまいと思ふ。……余は一日雨を凌いだ為単衣もズボン下も濡れきつて族装が一層みすぼらしくなつて居るので此女に対して何となく極りの悪いやうな心持がした。

女の美しさに気づいた節は、どうしても女を意識せずにはおれなくなつてしまふ。食事中唯い小豆飯の塊が思はずぼろりと膝へ落ちた時も、「見られはしないかと思つてみると美人は……落した小豆飯には気がつかぬ様子である。」とまず、女の方へ視線が向いてしまふのであつた。そして、女から素麵を冷やす話を聞けば、「余は此の女に白地の浴衣を着せて白い手拭をかぶせて素麵をさらさして見たいものだと思つた。」と、節の好尚に合った白い姿をした彼女を想像したりする。

余は思はず女を見ると女も同時に余を見た。……向き合つて見るとあまり近いので急に何だか面ぶせに感じたので余は視線を逸らして其口もとを見た。……女は唯無邪気に羞らふ所もないやうな態度である。それと余は更に平気で居憎い気持がした。譬へていへば女は凌霄である。……余は自ら凌霄にからまれた松の幹のやうな感じがした。……余は其白い横顔を上げしげと見守つた。さうして此優しい静かな昨日の浦を前にして何時までも唯立つて居たいやうな心持がした。

ここでは、自分自身をも想像の世界の中へ登場させ、主観的心情を素直に表現している。

女は更に土間へおりて新しい草鞋の紐を通して小さな木槌で其草鞋をとんとんと叩いて呉れた。さうして余の後ろへ廻つて両掛の荷物の上から座を着せてくれようとする。然しこの着せて貰ふことだけはしなかつた。何故だか黙つて着せてもらふことがしえなかつたのである。

美人の方は一向に節を意識しているわけではないのに、勝手に凌霄にからまれた松などと想像した節は、彼女の行動が全て気にかかる。そして、ますます彼女への意識が強くなつて平気で座を着せて貰ふことが出来なくなつたのである。しかしまた、そのことが作品としては清純な情趣を醸し出す原因ともなつており、「炭焼の娘」における最後の別れの場面（P 268下L 9）と条件は異なるが、行動と心情の交錯に余韻を感じさせるところは同じ手法だと言えよう。

「炭焼の娘」の「お秋さん」と「小木の宿の美人」を比較してみると、「お秋さん」の世間ずれしないいかにも生娘らしい羞らしい多い態度に対して、「美人」の方は特に節を意に介した風もない淡淡たる態度である。これは「お秋さん」が滅多に人の訪れぬ山住いであるのに対して、「美人」の方は平常から人と接することが多い旅館の人間であると言う環境の違いであろう。そう言う素材の違いが、「佐渡が島」の場合、想像の世界を生み出したり、伸びやかな筆致となつて現われたりしており、「炭焼の娘」と比較して主観的情趣はより強いと言えよう。

次に、「佐渡が島」における主観的傾向が最も明瞭に表われている箇所について一言触れておきたい。それは作品の最後の部分である。先に、「装飾」された「佐渡が島」の原因となつた美人について述べて来たが、その美人の回想で作品は結ばれているのである。具体的に一部分抜き出してみる。

○佐渡は博労だけでも充分であるが唯博労だけでは風地の切れのやうな感じを免れぬ。佐渡が島では小木の港で美人に逢うた。美人は風地へ金糸銀糸で刺繡つた牡丹の花である。さうして博労の娘はつややかな著我の葉へ干した染糸で刺繡つた菘でなければならぬ。

○余が美人を憶ふ時には幾分の乱を生ずる。

○佐渡の形見として余の手に残つたものは小木の宿の美人がともし灯のもとにゆかしがつた手帳の間の玫瑰の花と此草鞋とのみである。草鞋も小木の美人が髓で叩いてくれた草鞋である。……歩いて歩いて底が抜けて足のうらが痛くなつてならぬまでは此草鞋は穿き通して見たいやうに思ふ。

そして、小木の宿で、凌霄のような美人にからまれた自分を想像しながらも、出立の時塵を着せてくれようとしたのを遠慮した節が、「ぎつしり結んだ紐は手で解かねばいつまでも足について決してとれるものではない。此草鞋の紐はどうしてもぎつしり結んで置かねばならぬ。余はかう思ひながら……徐ろに草鞋の紐を結んだ。」と小木の美人に後髪を引かれる思いを濃く残しながら文章を終えている。

以上の引用でも明白なように、節の主観的心情が全面的に吐露されている。しかし、これは左千夫も「美人と草鞋は書き過ぎた感がある。」（注<sup>7</sup>）と指摘しているようにややくどい。作品としての情趣は、常に作者の感動の深淺に左右されるわけでもなく、また、率直な心情の表白の濃淡によるわけでもないのである。

「佐渡が島」の「小木の美人」は、節自ら述べている如く、彼自身の主観で潤色され、その心情表現にはしつこさを感じさせたが、佐渡が島の人情・風土を描写し、紀行文「佐渡が島」を作品として独自性のあるものにしていくものに博労と能がある。博労の明朗・爽快、しかも行き届いた親切は、読む者に佐渡の人情を端的に伝え、また、佐渡在住の島民によって守られている「能」は通常の島民の生活状態から推すと驚愕に価する——佐渡は貴人の流刑の地であったため、能などが伝承されていることは不思議ではないが、現在もなお島民によって上演が続けられていたことについてはやはり驚愕に価する——ものであるだけに、読者の感銘を深め、歴史的背景を濃厚に残している佐渡の風土に情趣を感じさせられる。

博労の家は、「部屋のうちには仕事衣やら穢い着物が乱雑に引つ掛けてある。天井からは煤が垂れて居る。其煤の天井から吊つてある簾棚も漆で塗つたやうである。」そして、博労自身は「縁側に足を投げ出して」「囃りかけ（梨の）を一手中でこすつて皮の儘むしやむしやと囃りつゞけ」ている。粗野ではあるが、しかし、「不味いものが好きなら佐渡の婿になつて十日も居るがいい」と「大きな口を開いて笑いながら」言う、素朴で、明朗で、爽快な気性の人物でもある。そして、節を名所白岩尾の瀑へ案内し、能見物に同道して、帰りの船便まで世話する親切な人物でもある。節は本文中に「佐渡は博労だけでも十分であるが……」と書いているように、博労を中心とする描写の中に佐渡の風俗・風土・人情などがおのずから出ており、紀行文として興味深い文章になっている。そして、その中でも特に興味を惹きつけられるのは、「漁村の能」である。「三井寺」「船弁慶」など能の上演中の描写は、精細で節としては手慣れた筆致であるが、中に、

狂女が二三歩さつて中繋つた右の手と手の足とを突き出した腰をぐつと後へ引いて飯面が屹と青竹の櫓を見あげた時に「ア、い、い」と際どい声が又余の耳許で響いた。見ると博労が向針巻をした首を曲げて反歯の口の開いて見惚れて居るのであつた。

など、心から能に熱中している博労の姿を挿入し、また、

……其男がどうも見たことのある顔だと思つたら此は小木の宿屋の主人であつた。袴をつけて端然たる姿が余り変つたので一寸見には分らなかつたのである。余は此を博労に話すと「ア、鉢の木の手仕を舞うたのがさうだ。どうも能う舞ふ」といつた。烏帽子をつけた静が白い足袋の先をそつと出し出し舞ひめぐる。四隅に吊つたランプの先が烏帽子に輝き衣装に輝いて美しい。「アレは小木の石屋でワキなら何でも務めるのだ」と博労が語る。など、演ずる者についての話も織り混ぜながら、能がこのようになら郷の人達によって、愛され守られている様子を具体的に描いて、佐渡の風土に独得の味と趣を添えている。節にとつては偶然出会わせた能見物ではあつたが、それによって、佐渡の風土を単なる

人情の厚さだけでなく、文化的伝統が島民の生活や人情にきめ細かく反映している状況を描き出すことが出来た。

かういふ孤島の僻邑に能の催しがあらうなどは夢にも思ひ設けなかつた所である。其見物人といふのが大抵は百姓や漁夫のやうなものであるだらうがそれが子供に至るまで静粛にして居たのは意外であつた。其役者といふのが桶屋や石屋や宿屋の主人などでありながら相応に品位を保つて見えるのも向う鉢巻をとつたことのない博労の平内さんが能の知識のあるのを見て此の島の人の心に優しい処のあるのが了解される。博労が遭うて其日から懇切であるのも宿屋で出掛けに必ず草鞋を足くれるのも小木の宿屋の美人が洗濯しておいてくれたのも皆此の優しい心の発動でなければならぬ。

佐渡の風土が能見物の描写で最高に盛り上げられ、作品としても、能見物の場面が入ったことで、重厚な味わいが出て来ている。そして、ここに引用した主観的心情の表白の部分も、具体的な事実裏付けされているのでしみじみと落ち着いた味わいを出している。

## 五

佐渡が島を含む今度の旅行で、節の出した書簡がかなり保存されているが、その書簡と作品との関係について少しばかり考察しておきたい。

今度の旅行に取材した作品の中で、最も早く発表されたのが、明治四十年の三月号と五月号の『馬酔木』に掲載された「鉛筆日鈔」である。この作品は、表題の如く日記形式になっていて、日付けごとに小見出しが付いている。内容は次の通りである。

八月二十八日 ▼黄瓜

八月三十日 ▼東海美人

八月三十一日 ▼山雉の渡し

九月一日 ▼猿 ▼鳥 ▼鹿の糞

九月九日 ▼会津に入る

節は、今回の旅行は紀行文として発表する意志を固め、克明なメモないしは日記を付けていた。この作品は、形式の上からみても、かなり旅行中のメモや日記に依拠しているものと考えられる。内容については、日付けからも明らかのように、八月二十八日〜九月一日までは松島から金華山までの牡鹿半島・金華山の紀行文であり、九月九日は松原峠・松原湖を中心とする紀行文である。前半の中で、分量も多く、内容も充実しているのが、八月三十一日の鮎川から金華山への渡航記と、九月一日の金華山登頂の記である。次にその中から一部抜き出してみよう。

雨が米粒になつた。幻の如く見えた金華山は復た雲深く隠れて裾だけが短く表はれた。山の裾はなつかしい程近い。

これは、船中から金華山を眺めた時の描写である。「なつかしい程近い」に筆者の近づきつつある金華山への期待がこめられている。だが、金華山紀行文文中このような心情が表現されているのは、この部分だけである。

雲が一方からだんだんに充げると三角に握つた握飯のやうな金華山が頭から押へつけるやうに聳えて居る。中腹の神社から下には缺で梢を刈り込んだやうな木立が青い芝の間に塩梅されて庭園の如く見える。常盤木の繁茂した山上には綿打ち弓から飛ぶ綿のやうな雲がちぎれて居る。

一行はばらばらになつて先達に跟いて行く。左を仰いで見ると鬱蒼たる山の巔は頭にかぶさつた様で其急峻な山の脚は恰かも物陰から大手を開いて現はれた人が奔馬をはつたり喰ひ止めた様に此小径で切断されて居る。小径については到る所青芝と糸薄が茂つて居る。さうして糸薄の中には疎らに赤松が聳えて居る。時々鹿に逢ふことがある。

以上の引用は金華山登山の一節である。事実の客観描写はよく整理されて叙述される確・鮮明ではあるが、主観に訴える要素が全くないため作品は全体的に平板になっている。

ではこの金華山紀行文は、書簡の中でどのように扱われているだろうか。現存するものの中では、この旅行中の他の場所に比較すると金華山を絶賛したものが一番多い。

○金華山は船から上ると、刈込んだ様な青芝に糸すすぎが茂つて、鹿がぞろぞろ土産を買ひに来る。金華山は見えてよく、渡つてよく、洵に天下の絶勝に候。小生は晴雨共に見申候。幸運なりと存候。（明治39年9月1日・佐久間政雄宛はがき）

○：殊には牡鹿半島の万石の浦（ウシシヤウ）と称する入江の幽邃限りなき形勝の地を過ぎ、金華山の晴雨を賞して、終生忘るべからざるものなりと存じ候。（明治39年9月3日・寺田憲宛封書）

○金華山は晴雨共に見申候。洵に天下の勝地と存じ候。山（マ）の渡とて二十四町の海を越ゆることに候が、吹き降りにて小生には非常に愉快を感じ申候。……山蛭には食はれ候へども、金華山はよき山に候。（明治39年10月4日・平福百穂宛封書）

いずれも金華山を絶賞し、満足した心情を述べているが、前述のように作品の中では、金華山への率直な心情が全く表現されていない。これは、旅行中のメモや日記がかなり克明で客観的事実の描写に中心を置いていたこと。そしてそれが原形に近い形（作品化の過程において文学作品として捉え直す姿勢がないこと）のまま使用されたためであろう。（注8）

書簡で金華山をあれだけ絶賛しているのであり、作品としても、この作品が旅行後最も早い作品であるから、作者の心情が一番強く現われると思うのだが、そうでないことは、旅行中のメモや日記の付け方が客観的な事実の描写のみに力が注がれていたことをはっきり意味している。そして、節自身も「従来小生は事実を拘泥し過ぎたる弊有、随つて余裕ある作品に乏しい」（注9）と反省している如く、細叙のみに注意を奪われている自分の欠点に気づいていくのである。

では次に、佐渡が鳥は書簡ではどのように扱われているだろうか。

○佐渡は雨の金北山に登り、雨に真野の御陵を拝し、赤泊より越後の寺泊に渡り申候。（明治39年9月23日・佐久間政雄宛はがき）

○佐渡は遠くで聞いてよく、地図でよく、新潟で見て是非共渡つて見たくて、其実左程のこのない所に候。四日のうち三日は雨に降られ候へども、小木の港の宿にて非常に美しき嫁さんが、出掛けに草鞋をたてて小さな鞆でとんとんと叩いてくれ候所、甚だ感じよく候ひき。（明治39年10月4日・平福百穂宛封書）

前者は単なる旅程のみを報告している。後者は全体として佐渡に失望しているが、小木の宿の美人のことは極めて好印象を受けていたことが想像される。美人のことは、書簡の材料としては大変興味深いものだけに、特に取り上げられたとも言えようが、「佐渡が鳥」の中心的な存在であり、作品の主調となっているところを見ると、単なる書簡上の興味として取り上げられたのではないようだ。節にとっては佐渡が鳥紀行の中で最も印象深い出来事であったと言えよう。

節にとつて佐渡が鳥は旅行の最初からの目標であったのだが、実際に行つてみて「左程のこのない所」であった。しかし、作品化の際、小木の宿の美人が叩いてくれた草鞋から佐渡の人間の人情に及ぶとき、博労がクローズアップされ、さらに博労と共に見た能へと佐渡が鳥の思い出が拡張していったことが想像される。「佐渡も半年の苦心に有之候」（注10）とあるごとく、製作過程で、思考・印象が統一されて作品として完成された。このことは、節の「佐渡が鳥」の自筆稿本に「波の上」と言う一節があり、これは佐渡が鳥渡航の船中での出来事を梨を中心にして書いたものであるが、発表された「佐渡が鳥」には全く姿を消していること、そして、梨については、先の百穂宛書簡で「新潟は信濃川の泥水を飲む所厭ふべく候へども、梨の安くて且つうまきは類なく候。」とあって、「佐渡が鳥」執筆にあたっては一つのモチーフであったと思われるのだが、省略されてしまったことから、充分言えることであると思う。——もっとも、梨のことは全く「佐渡が鳥」の作品から抹消されたのではなく、博労の家で梨を食べる描写の中に生かされている。（博労は皮の儘むしゃくしゃと嘸るところ。節は

長く伸びた瓜で皮をはがすが、その皮が鋏のようになって落ちるところなど)――

「佐渡が島」製作の原点が小木の宿の美人と草鞋にあったわけであるから、節としては、最後の「書きすぎ」と言われた一節は書かずにおれなかったところであろう。しかし、作品としてはその動機まで全て書き込む必要はなく、その整理が必要であったと考えられる。しかし、ともかくも、「佐渡が島」は客観的事実から一応離れて作者の心中で再生された事実、それを主題としながら書いていく方法――歌における主観の導入と同様である――で作られた作品と言えよう。

この旅行の中で一番最後に作品化されたのが、「旅の日記」である。これは、最初『阿羅々木』の一卷二号(明42・1)に「旅の日記の一部」として発表した作品を後に改題したものである。

九月一日、金華山から鮎川へ戻り、旅人宿で汽船の出発を待っている記事。その翌日、塩釜へ向う汽船上でのこと。九月四日、仙台から山形へ向う途中の作並温泉の記事。九月五日、関山峠でのことの四場面から構成され、いずれも少女たちが狭い帯を締め、帯の結び目がこぶし程の大きさであることに興味を覚えて綴った作品である。それはこの地方の風習なのであろうが、それに対して節はその可憐な姿をいつくしむと同時に、傷ましい眼で暖かく見守っている。先の「鉛筆日鈔」がその日の紀行の客観的な描写を中心としているため、全体としてのまとまりがなかったのに対して、この作品は同じ日記体ながら物語風な味わいを出している。しかし、構成としては平板であり、また、小さな帯の結び目に固執しているため作意が見えて、作品としてはかえって味がなくなっている。たとえば、九月五日の関山峠の記事は、明治四十一年十一月、『為桜』三十三号へ「関山峠の朝」と題して掲載されているが、それには帯の結び目には何も触れていない。この関山峠

の部分は「旅の日記」の中でも情趣のあるところのだが、最後に帯の結び目の記事に出会うと、いかにも作意的な感じがしてそのためかえって作品の味が損なわれているようである。

旅行中の印象が作者の心中で整理され再生される、いわゆる節の「主観」による事実で描写されているのだが、それに作意が加わると厭味が出て来る。「佐渡が島」は確かに、小木の宿の美人を中心に佐渡が島の印象が拡大していったのだが、その間の経過に作意がなく、そのためしっとりとした情趣を持った作品として完成した。ここに過不足のない文章表現の困難さをつくづく感じるのだが、節としては、既に明治四十一年三月に小説としての処女作「芋掘り」を発表しているので、「旅の日記」は小説とは異なり、やはり事実の描写に中心を置いた写生文で小説のようなプロセツともないと言うものの、一つの主題のもとに統一された文章は、小説に力を注いでいた節の一面がはからずも現われたと言うべきであろうか。ともかく、単なる事実の羅列から抜け出て、自分の心中でモチーフを温めたものを表現しているのが、物語風な写生文となったと言える。

## 六

「佐渡が島」以後の写生文の中で、佐渡が島などへの旅行中に取材した「白甜瓜」と「旅の日記」を除くと、「松虫草」(明41・4「アカネ」)、「菜の花」(明42・8「ホトトギス」)、「愛せられざる花」(明43・1「アララギ」)のちに「しらくちの花」と改題)の作品がある。いずれも花の名を題名にしているところが共通の特徴である。

「松虫草」は、堺市郊外の山陵、伊勢の能褒野、大垣の養老の滝見物の紀行を三節にまとめた作品である。一は、舳の松の大寺餅の話が入っており、「山雉の渡」には「大寺餅」として独立して収録されている。明治三十六年夏、関西・東海地方を旅行した時の経験に基づいており、その折の作歌をまとめた「西遊歌」(明36・11

『馬酔木』にも、それぞれ詞書を付した七首の歌がある。歌の方は、ほとんどが御陵に中心を置く写生歌である。写生文の方も自然の描写は、歌と同じ素材を用い、また自然の見方に関して特に出た場合との差はない。ただ、大寺餅などの話題が入り、それが中心のようになっているので、歌の場合とは趣を異にしている。

二と三は、明治三十八年八月十八日から十月十三日までの約二か月間を費した大旅行で、房州から信州を経て、関西各地方を巡った時のことに取材している。この時の作歌は「覇旅雑詠」と題して、明治三十八年十一月号の『馬酔木』に発表した。

二は、十月六日、ぐっしり雨に濡れながら、能褒野を押し歩いたことが書いてある。

能褒野神社の描写の部分引用してみよう。

○神社といふてもそれは見るかげもない小さなもので極めて小さな鳥居が建ててある。あたりは低い松が疎らに立つて居て、そこら一杯に生えて居る末枯草は点頭くやうに葉先を微かに動かしながら雨に打たれて居る。鳥居の前には有繫に宮守の家らしい建物がある。わびしげな住居で障子にも破れが見える。しぶきに湿る縁側には芋殻を積んでそれへ筵を掛けてある。（松虫草）

○浅茅生のもみづる草にふる雨の宮もわびしも伊勢の能褒野は

秋雨のしげき能褒野の宮守はさ筵おほひ芋のから積む（覇旅雑詠・詞書略）  
ほとんど同じ情景が描写されており、写生文と歌との間に、対象に向う態度の差は出ていない。

三は、九月十六日、柘植潮音と養老の滝に遊んだ時のことを書いたもの。

○養老の地へつくとそこは公園である。あたりには料理屋なども建てられてあるが一带にさびしく桜の木だけは葉があかくなつてはらはらと芝生に散るものもある。白い花の芙蓉が其木蔭にさいている。（松虫草）

○養老の公園

落葉せるさくらがもとの青芝に一むらさびし白萩の花（覇旅雑詠）

自然の実景の描写には特に両者の間に問題は無い。ただ、白芙蓉

と白萩の違いがある。しかしこれは意外に大きな意味を持っていてのではない。実は、写生文の方はこの養老の滝の茶店に色の白い女が居て、滝に打たれにくる人のために簡単な世話を焼いてくれる。女についての描写は、

女は無造作な帯の締めやうをして足には鎌刀のやうにまくれた古い藁草履を穿て居る。着物を干すために延した其手が非常に白い。首筋も凄じ程白い。女は着物を干し畢ると落ちさうになつた帯を両手で一掃りゆりあげて暫く遠くを見て居た。

と淡淡としており、「炭焼の娘」や「佐渡が島」に現われていた主観的表現はないが、滝の白さと共に、彼女の白い姿が印象的な作品となっている。さきの、養老公園における自然描写の白芙蓉と白萩だが、植物に特に詳しく関心の深い節が無造作に書き違えるとは思われない。したがって故意に白芙蓉を配合したものと考えられるのだが、それは、明治四十年の夏、井上艶子との縁談が進められていた頃、節は艶子を白芙蓉の花にたとえて「夜みれば殊によろしき白花の芙蓉なるべき其女子を」（注11）と詠んで岡麓へ書き送ったりしていたことがあるからである。縁談は「佐渡が島」完稿後、破談になったのだが、その後の写生文には、女性が立場しても、客観的にその美しさを叙すだけで主観的心情を述べることがなくなった。ただ、ここでは、白芙蓉の花に託した虚構に節の心情をわずかに汲みとるだけである。そして、節の写生文は、歌と比較してわかるように、ほとんどの描写は実景であるが、女性の登場した場合のみは多少の虚構が加えられるとも言えよう。これは、「佐渡が島」が事実がそのまま表現されているのではなく、節の主観のベールを通して真実が表現されていると述べた節の意見を、具体的な事実として証明した部分と言える。

「松虫草」は以上のように三節から成るが、これは今までの紀行文のように時間的順序に従って書かれていない。一と二、三の紀行は時間的に二年間の差があり、二と三も実際の旅程と順序が

逆になっている。このように構成が、事実とは全く無関係になっていることはこの作品の特徴で、単に事実の描写のみに終始した写生文に飽き足らなく思い出したこと、それは小説へ筆を染める準備が整ったことでもあろう。(注12)

また、この写生文は「松虫草」と題名が付いているが、本文中、松虫草の名前は出て来ない。「羈旅雜詠」をみると、霧が峰高原で詠んだ歌「うれしくも分けこしものか遙々に松虫草のさきつづく山」に「松虫草」が出て来るのだが、このような題名の付け方も面白い問題である。

「菜の花」は、明治四十一年四月、京都、吉野、奈良に遊んだ時の紀行の一部を作品にしたもの。この時の旅行は歌が三首あるだけで、この「菜の花」が唯一の作品である。しかし、旅行中の書簡はかなり残っており、節の動静を伺うことは出来る。

作品は帰宅間近い旅行の終末が題材となっている。

奈良や吉野とめぐつてもどつて見ると、僅か五六日の内に京は目切と寂しく成つて居た。奈良は晴天が持続した。それで此の地方に特有な白く乾燥した土と、一帯に平地を飾る菜の花とが、蒼い天を載いた地勢と相俟つて見るから朗かで且つ快かつた。京も菜の花で郊外が彩色されて居る。然し周囲の緑が近い為か陰鬱の気が身に逼つて感ぜられるのである。

これは書き出しの部分だが、京と奈良を対比し、京の地勢・風土的特色などが的確に表現されている。この後は、粗末な佻しい宿の情景から筆が進められ、親切な河井さんという人の世話で、翌日行なわれる島原の太夫道中見物の下見に行く。翌日はこの見物のために旅程を二、三日延した太夫道中である。(注13) 仲居のおゑんさんの地味だが美しい姿態と対比させながら太夫の道中姿を細叙している。現実の世界から隔絶した、時代色に塗りつぶされた世界、人工で装飾され作りあげられた世界にあって、おゑんさんの美しさは節に安堵の息吹を与えるのである。見物を終えて外へ出る。

廓の外はすぐに田浦である。田浦へ出て外から見ると島原は唯時代を帯びた地味な一廓であるに過ぎぬ。菜の花が田浦に近く続いて強い南風にゆさぶれて居る。泣き出し相に低い空が西の山々とくつついて薄墨をまけたように山々を更にほんやりとさせて居る。山の間へ狭く平地が走つて居る。菜の花は断続して其平地の限りにほんやりと見える。白く乾いた田浦の地は吹き立てられて、菜種の葉が一枚々々皆白く其埃を浴びて居る。

そして、節は「切な相にゆさぶれて居る菜の花を後にして路傍に一人の乞食が坐して居るのを見る」。乞食に施錢をし、後から来た女たちも投げ銭をするのを見て、節はやや食傷ぎみの島原の世界からようやく現実に戻り、爽快な気分になる。

「菜の花」の中心は、珍らしい島原の太夫道中にあるのだが、作品の最初と最後に出て来る菜の花の描写に、京の風土の特徴がよく現われている。

全体的にこの旅行中、菜の花がとても印象的であったとみえて書簡の中ししばしば出て来る。

○名古屋以西ハ菜ノ花ヲモテ飾ラレタリ(明41・4・12、藤倉新吉宛)

これは、近畿地方の特徴である菜の花の景観を大きく捉えている。花の吉野は次の如くである。

○吉野の町と如意輪寺道の上部には菜の花やらさくらやらに朝日が一杯にさし掛けて居る。(明41・4・18、藤倉新吉宛)

○吉野の山は花の山といふよりも麦と菜種の山といふべし。桜の林よりは遙か上に麦青くして菜の花の黄なるを見る。(明41・4・18、橋詰孝一郎宛)

「菜の花」の舞台となった京都の西の郊外は、

○島原も壬生寺も外へ出れば目の及ぶ限り菜の花にて目もさむる計りに候。(明41・4・22、藤倉新吉宛)

と鮮やかな菜の花が印象的だったようである。作品に見られるやや重く沈んだ調子は、書簡の中には感じられない。事実、この旅行は節にとってはおそろしく生涯で一番派手で、華やかな旅行であったと思われる。四月十三・十四の両日、祇園の一流茶屋で遊び、得意げに横瀬夜雨や橋詰孝一郎へはがきを出している。

一力には、「其美殆んど言語に絶し候。」（注14）と感じた美しい舞子などもいた。また、丁度桜の花の季節でもあるので、祇園の夜桜、糸桜、御室の桜などの便りもある。しかし、美しい舞子も桜の花も節の琴線に触れ、作品として結晶するまでに至らなかった。あるいは、節は最初から自分の作品の世界とは考えていなかったと言わなければならないか。

「菜の花」は島原の太夫道中という珍しい素材故に作品化されたが、素材の持つ華かさにもかかわらず作品としては沈滞した情趣を作りあげている。節の主観で捉え直した世界が作品となったのである。そして、素材を主観的に捉え直す時に、この旅行を契機にして古美術に心を寄せるようになった、「洪いもの」への関心などが間接的ではあるが影響しているものと考えるのである。

「しらくちの花」は原題が「愛せられざる花」で、最初、『為桜』の明治四十二年九、十月号に発表され、その後、明治四十三年一月号の『アララギ』に再録された作品である。

明治四十一年の春、渋温泉で鶴爺さんと言う猟師が語った、樹に絡まって白い花を付けている、しらくちの花を素材の中心において、節のおほらかな白い花への関心についてまとめたものである。明治三十六年、箱根山中の霧の中で見た白百合の花。同じく三十九年、赤井嶽でみた霧の中で満開の花を付けた栗の木のことをプロローグにして、鶴爺さんの話に入る。その中で、爺さんに聞いたしらくちの話は、鶴爺さんの存在と共に忘れられなくなった。そして節は長年一人でしらくちの花とはどんなものか知らないままに、霧の中の白い柱のような花を想像していた。ところが、明治四十二年、十和田湖へ行った時、偶然にユカガしらくちの花の実であることを知り、しらくちの花が、白く打った点の集まりのような花であると知ったと言うエピソードで終る作品である。

花を中心に置いて構成されており、「旅の日記」が帯の結び目に

焦点を合わせてあったが、それ以上に素材の焦点は絞られている。また、今までの作品が、時間的に短い一定時間内のことを中心にして構成しているのに対して、この作品は長期間内のことをいくつかの回想で綴る構成も今までになかった傾向である。その意味ではいろいろと新しい面をもった写生文ではあるが、そのことは、もう従来の写生文が行き詰まったことを証明していることにもなる。手法としては、細叙による客観描写はこの作品の場合でも十分に生かされているが、素材へ向う姿勢が主観的に選択されていること、従って、従来説えられて来た、客観的態度による客観描写の姿勢が完全に崩れてしまっている。客観的写生文はもうその任を果したと言わなければならないか。この頃は文壇においても写生文は行き詰まりを見せていたが、節自身にとっても終息の状態を迎えたようである。

（注1）「佐渡が島」は「馬酔木」へ発表するつもりで、左千夫のもとへ送ってあったのが、洪水のため原稿が紛失した。明治四十年九月六日消印の節宛左千夫のはがきによると、「貴稿は足探りにて泥中より拾ひ出し候へども、どろ／＼にて紙の形殆どなくなり居候。」とある。節は改めて清書し、それが「ホトトギス」に掲載されることになった。

（注2）『俳諧史論、後篇余裕派文学考説』市橋鐸先生喜寿記念論文集刊行会、昭和45・3刊。

（注3）『長塚節（近代短歌・人と作品9）』桜楓社、昭和41・10刊。

（注4）『土の人長塚節』春陽堂書店、昭和15・12刊。

（注5）「佐渡が島」における主観性についても、それは、虚子が「写生文界の動向」で述べているごとく、客観的な写生文の範疇内での主観的傾向であって、「佐渡が島」が写生文全篇の中において主観的傾向を特色とするというわけではない。

（注6）拙稿「長塚節の写生文についての研究・その一」（金沢大学教育学部紀要第二十一号）昭和47・12刊。

（注7）明治四十年十一月三日消印の節宛はがき。

（注8）節は文章の推考に関しては綿密で、この場合でさえも三種類の草稿がある。

(注9) 明治三十九年十月十九日付け 寺田憲宛のはがき。

(注10) 明治四十一年九月二十日付け 島木赤彦宛封書。

(注11) 明治四十年九月二十日付け 岡麓宛封書。

(注12) 節の小説としての処女作「芋掘り」はこの「松虫草」の一か月前に発表された。

(注13) 明治四十一年四月二十三日付け 藤倉新吉宛はがきに「明日ハ太夫ノ道中ダ。今日の筈ノガノビタノダ。」とある。

(注14) 明治四十一年四月十五日付け 橋詰孝一郎宛封書。

なお、本文中に引用した節の文章はすべて『長塚節全集』(春陽堂・大正15刊)によった。

備考—本稿は、昭和四十八年一月、東北大学文学部で行なわれた、日本文芸研究会で口頭発表したものに一部修正を加えてまとめたものである。

(昭和四十九年九月十七日受理)